

視覚表現に見る

視覚から高次認識への連続性 視覚の文化モデル

田 中 聡 子

0. はじめに

本稿^{注1}は、視覚に関わる主要な日本語表現である動詞「みる」、動詞「みえる」、名詞「目」を取り上げ、これらの表現が視覚に関わる意味を表すだけでなく、高次認識に関わる意味をもごく自然に表しうること、またこの体系的な拡張を可能にするものが、我々の認知システムとしてのメタファー、メトニミー、シネクドキーの働きであることを、言語事実によって明らかにしようとするものである。

こうした比喩的なものの見方が言語の意味に深く関わっていることは、Lakoff & Johnson (1980)、Lakoff (1987)の研究、そして佐藤(1978; 1981; 1986)の再評価などを通して、広く認められてきている。

ここで用いる主な概念については次のように定義する。ただし最後の三項目は、佐藤信夫(1978)の定義をさらに簡潔にまとめた初山(1997)の定義による。

知覚・知覚領域：知覚器官を通して事物の存在を知り、それを犬なら犬と即座にカテゴリー化するまでの、無意識でも可能なほどにルーティーン化されたレベルの認知作用(視覚はその一つ)・それに関わる意味の領域

高次認識・高次認識領域：高度な抽象化と分析を通して総合的な判断・評価を行うと考えられる上位レベルの認知作用・それに関わる意味の領域

メタファー：「二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」(初山、1997：31、以下同様)

シネクドキー：「より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な事物・概念を表すという比喩」

メトニミー：「二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて他方の事物・概念を表すという比喩」

総体としての視覚表現の意味のネットワークが示すのは、視覚と高次認識とを連続的

に捉える我々の文化モデル、いわば視覚の文化モデルである。文化モデル ("cultural model") とは、ある社会の成員に共有される文化特定の認知スキーマであり、通常意識されることなく前提とされる世界についての理解 (解釈) の仕方であって、我々が世界を理解し世界と相互作用を行う上で大きな役割を果たす。科学者など専門家の中で共有されるモデルもあれば、専門家でない一般の人々の共有するモデルもあるが、民間モデル ("folk model") と呼ばれる後者は、言語への反映という意味で特に重要である^{注2}。

1. 動詞「みる」の高次認識的用法

1.1 高次認識表現としての汎用性

動詞「みる」については、田中 (1996 ; 1999b) が分析したように、視知覚行為のみならずそれに伴って生じる事象までを「みる」の意味に取り込む文脈的解釈が語義として慣習化されていくプロセス、すなわち「スクリプト形成に伴う多義化」を核として、多義ネットワークが形成されている。

しかしここでは、高次認識領域への拡張という視点から「みる」の意味を考察する。この拡張は、一面では上記「スクリプト形成に伴う多義化」の一環であるとともに、また別の側面では、異なる意味領域への言語形式の転用としても動機づけられる。

1.1.1 判断の対象となる 抽象的実体 を表す語との共起

「みる」が、高次認識の対象となるべき抽象的な実体を「を」格補語として取る典型的なケースとして、「 N_1 (の中) に N_2 をみる」という複合表現がある。これは、ある名詞 N_1 の表すある事物に、別の名詞 N_2 の表すある属性を帰属させたり、あるいは N_1 の表す実体を、 N_2 の表すある実体の表象または典型例として捉える場合にしばしば用いられる形式である。

(1) 手塚氏の作品に、ヒューマニズムを見るとすれば、それはおそらく違うであろう。 (『涼しい』 ㉮、189)

(2) 卒論のタイトルは『玉子焼きに見る文化度の考察』というものである。 (『須磨』 ㉮、19)

(3) 生きもののしなやかさの最大の顕現は、再生 失ったからだの一部が、そっくり元通りにつくり上げられる という現象に見ることができます。 (『生物学』 ㉮、64)

ここで「みる」の対象物は抽象的実体であり、当然「みる」が表すのは、単なる視知覚行為ではなく抽象物を理解し・判断する高次の認識行為ということになる。このパター

ンは、話者の言語知識の中にコンストラクション・スキーマ、つまり類似の複合表現から抽出されるスキーマ的記号単位 (Langacker, 1999: 19) として確立していると考えられる。

しかし「みる」のこのような高次認識的な用法がこのスキーマに依存して生じていると考えるのは妥当ではない。このスキーマを離れても、「みる」は高次認識の対象であるべきものを「を」格補語として取ることができる(次の例はその変形も含む)。

(4) a 不安の向こうに、そのとき成美は自分自身の限界をはっきり見ていた。

(『贗作師』、60)

b まだ見ぬ未来よりも、私は自分が足跡を残してきた過去のほうに興味がある。

(『プワゾン』、459)

(5) さて、ラマルクの話に戻しましょう。彼が大好きだったテーマの一つである、洞窟に住んでいる生物は目が退化している、という事実をみてみます。

(『生物学』、160)

(6) a (...) 能信にそう言ったところをみると、頼定も、さほど酪酊しているわけでもなさそうだ。

(『望みし』、136)

b 晴豊の観るところ、信長は謙信をもはや天下取りの決定的な障害とは見做していなかった。

(『天正』、216)

(7) ほら見ろ。少しでも気を緩め、油断していると俗界の下劣な誘惑がすぐに忍び寄ってくる。

(『デウス』、282)

例(4)の「限界」や「未来」、また実例は挙げないが「本質・真相・程度・問題」などを対象とする「みる」の用法には、特に修辞性は感じられない。例(5)の「事実」、例(6)の「ところ」も分析的・総合的な判断、すなわち高次認識の対象であるが、やはり修辞性を狙った表現ではない。例(7)のような「見ろ」の対象は特に言及されることはないが、明らかに発話時点で成立している何らかの事態、すなわち高次認識の対象である(日常の会話にもしばしば現れる「今にみる」「ぼくのみるところでは」も同様)。

したがって、「みる」の高次認識的な意味がコンストラクション・スキーマの意味からたまたま生じたものであるというよりもむしろ、高次認識表現としての「みる」の機能の確立がこのようなスキーマの形成を動機づけている可能性が高い。

1.1.2 判断内容 を表す表現との共起

「みる」はまた分析的・総合的な判断の内容を表す表現と共起して、そのような高次認識作用を表すことができる。

「～とみる」構文(森田(1989)の言う「…ト見る」構文)は、そのような判断

内容 と「みる」の共起する慣習的に安定した形式、つまりコンストラクション・スキーマである。

(8) 持統と天照大神との相似関係はきわめて深い。したがって、「記紀」におけるアマテラスは持統天皇の反映、とみたほうがわかりやすいのである。

(『消された』、36)

(9) 宋は党項族の抵抗を、辺境の異民族の蠢動とみていた。(『中国』六、261)

ここでも、「みる」の高次認識的解釈がこのようなコンストラクション・スキーマに依存して生じるにすぎないと考えることは妥当ではない。なぜなら「みる」はこのスキーマ以外でも、次のように判断内容を表す副詞的表現と共起して高次認識行為を表すからである。

(10) 高く(低く・重く・軽く・上に・下に・甘く …)みる

こうした表現はそのメンバーが狭く限定されていないカテゴリをなす。いくつか実例を挙げておこう。

(11) もっとも、彼女に言わせれば、「男勝り」という表現自体、男性を1段上に見ていることになるので、大いに不満らしい。(『須磨』、21)

(12) 仮想上の危険はより大きな危険で、現実の危険はより小さな危険だと思うのは、単に人間の想像力を重く見た結果に過ぎない。(『涼しい』、111)

したがってここでも、「みる」の高次の認識作用を表す用法の慣習化が「とみる」構文の形成を動機づけていると考えた方が妥当であると思われる。

1.1.3 判断の様態 を表す表現との共起

さらに「みる」は、次に示すような 判断の様態 を表す広範囲の副詞的表現とも共起して、高次認識行為を表すことができる。

(13) 主観的(客観的・歴史的・科学的・長期的・短絡的・分析的・総合的 …)にみる

次はその実例である。

(14)(…)中国地方は、比較的騒乱の少ない地方であった。大内が睨みをきかしていたせいもあるが、地政的に見ても山また山に囲まれる地形が外敵の侵入を防いでくれた。(『元就』、67)

(15)一八八八年六月から一〇月にかけて 単に枚数上の点からだけでなく、内容的に見て ゴッホの発散するようなパワーを最も感じさせる時機であったと言える。(『ゴッホ』、47)

また、「から」や「で」という判断基準や視点を表す助詞を含む表現とも共起するが、こうした助詞を含む表現も 判断の様態 の一側面を担っている。

(16) ~から・~で

以下はその実例である。

(17) a 後世からみると、竹阿弥は実に驚くべきことをのべたのだが、十兵衛は驚かない。 (『柳生』上、38)

b こうした多くの例から見ると、ともかく発生してくる際に、相手のない、あるいは相手に不足のある神経細胞は、間引かれてしまうのが神経系の通例らしい。 (『唯脳論』、138)

(18) つまりヒトという生き物は、標準代謝量でみる限り、ネズミ - ゾウ曲線にしたがう「標準的な」恒温動物なのである。 (『ゾウ』、39)

このような 判断の様態 表現と共起するとき、「みる」が表すのは、明らかに総合的な 判断 という高次認識作用である。こうした「みる」の用法が「ものの見方」のような高次認識に関わる複合表現の形成を動機づけると考えられる。上の実例からも推測できるように、判断の様態 を表す表現と共起して高次の 判断 を表す「みる」の用法は広範囲にわたり、その多くが慣習的に安定している。

以上に見てきたように、高次認識作用を表す機能は、動詞「みる」の重要な意味機能の一部として慣習的に確立している。言い換えれば、視覚動詞「みる」には、高次認識表現としての汎用性がある。

1.2 「みる」の高次認識的用法の特徴：分析的・総合的な判断

今度は、味覚や触覚など他の知覚情報を含む「みる」の用法を取り上げてみよう。

(19) a 味をみる (味覚情報を含む)

b 湯加減をみる・脈をみる (触覚情報を含む)

c エンジンの調子をみる (視覚・聴覚など複数の知覚情報を含む)

d 専門家にピアノ (または他の楽器) の音を見てもらう (聴覚情報を含む)

このようなケースでは、視覚は関与しないか、または関与するにしてもそれが中心ではなく、味覚、触覚や聴覚の方が情報源としてはより重要である。

上の例(19)の「みる」を他の知覚動詞に置き換えると、不自然になるかまたは意味がかなり変わってしまい、パラフレーズとしては成立しにくい。

(19') a ? 味を味わう・味わう

b ? 湯加減に触る (触れる) ・ ? 脈に触る・脈に触れる

c ? エンジンの調子を聞く

d 専門家にピアノ (または他の楽器) の音を聞いてもらう

まず「味を味わう」の不自然さはトートロジーが理由であるとして、「味わう」だけにした場合、感覚的・情緒的な側面が強くなり、「味をみる」のように冷静で分析的な

判断 の意味は伝わりにくい。

また「湯加減に触る（触れる）」がおかしいのは、「加減」という表現が、ある基準に照らして熱すぎるとかぬるすぎるとかの結論を導く分析的な 判断 の対象であるのに対し、動詞「触る」にはそのような 判断 を表す意味用法がないということが理由であると考えられる。「脈に触る」も同様で、動詞「触る」は単なる物理的な接触を表し、健康状態を読み取るための記号としての「脈」を調べ、分析的態度で行う高次認識作用を表しにくいゆえに不自然となる。「触れる」の方はやや自然であるが、動詞「みる」が自動的に 判断 を表せるのに対して、「触れる」では接触行為そのものの概念が顕著で、そこからのメトニミー的推論として 判断 の意味が伝わるにすぎない。

最後の「きく」だけがパラフレーズとして可能であるが、これは「音」という聴覚領域を明示する語の存在のためであろう。しかしながらこの場合も、「みる」に比べると知覚行為の側面がより際立ってくるという違いは否定できない。

今度は逆に、他の知覚動詞が知覚行為の範囲を超えた意味に解釈される例を見てみよう。

(20) a 優しさ（優しい人柄）に触れた。

b 秘密（下心）をかぎつけた。

これは動詞を「みる」に置き換えても意味がさほど大きくは変わらず、パラフレーズが可能である

(20') a 優しさ（優しい人柄）をみた。

b 秘密（下心）をみた。

ただし視覚以外の知覚の概念を明示する表現があると「みる」への置き換えが困難になる傾向がある。

(21) 秘密の匂いをかいだ。

(21') ? 秘密の匂いをみた。

以上から明らかになるのは、先の例(19)のような他の知覚に関わる事態を表す「みる」の用法でも、中心的に重要なのは情報源としての知覚行為ではなく、分析的・総合的な 判断 という高次認識作用だということである。一方「みる」以外の知覚動詞は、直接的な知覚行為や情緒的側面（味わうなど）と切り離しがたい傾向があり、冷静で分析的な高次認識作用を表しにくい。そこで例(19)の「みる」が他の知覚にまで広がる意味を担うのは決して偶然の結果ではなく、高次認識表現としての「みる」の慣習化がそれを動機づけていると考える方が妥当である。

一般的な言い方をすれば、視覚領域から高次認識領域への「みる」の意味拡張は、類似性に基づく異なる意味領域への表現の転用、すなわちメタファーということになる。例えば、空間的な「先（前方）をみる」から時間的な「先（未来）をみる」への拡張に

においては、「先」も「みる」も典型的なメタファーと言えよう。

ところが、知覚作用も高次認識作用も含めた認知作用一般という上位レベルの意味領域を考えたとき、その下位領域の一つである視覚領域から、別の下位領域である高次認識領域への転用というだけではこの「みる」の拡張は捉えきれない。「世界・事態・ものごと・状況をみる」などのように、知覚作用も高次認識作用も含めた認知作用を表すことがきわめて多いからである。こうしたケースにおいては、視覚領域と高次認識領域という切り離された二つの領域間の転用とは考えにくく、それよりもむしろ、佐藤(1986)にならって言うなら、上位語・下位語の関係のうちを揺れ動くシネクドキー的な意味の伸縮運動をここに見るべきであろう。

そこで、典型的なメタファーとするのがふさわしい上述のようなケースもあることを考慮して、視覚領域から高次認識領域へのこの「みる」の拡張については、メタファー・シネクドキー的拡張^{注3}と呼ぶことにしたい。

次節では、視覚動詞「みえる」および視覚名詞「目」の意味もまた、動詞「みる」と同様に、高次認識領域への拡張を体系的に示すこと、すなわち視覚領域における多義ネットワークの各節点が高次認識領域における多義ネットワークの各節点に対応するような仕方で拡張していることを見ていく。

2. 動詞「みえる」および名詞「目」の「みる」との並行性

2.1 動詞「みえる」の場合

2.1.1 視知覚行為のフレーム^{注4}に基づく視覚領域での多義化

動詞「みえる」と動詞「みる」とは、どちらも視知覚行為に関連して意味が特徴づけられるという共通性を持っている。その違いは、現実世界をどのように切り取り、概念化するかという点にある。

「みえる」の基本的な意味は、次の例が示すように、(A) 対象が視界内に存在すると記述できるような概念であると考えられる。

(22) a 突然、通り矢の鼻に旗がひるがえるのが見えた。 (『見知らぬ』、265)

b ビルのほうに人の動きが見えて、俺は煙草をくわえたままそちらに目をやった。 (『殺人者』、74)

この 対象が視界内に存在する という概念は、視知覚行為を可能にする環境、つまり「視知覚行為を核とする出来事」の舞台となる環境の概念である。ここで「出来事」は、行為も行為主体もその対象もその他もろもろの条件もすべて含めた複合的な概念とする。「みる」が視知覚行為 (action) を表すのに対して、「みえる」は、基本的には、その行為の生じる環境 (setting) を捉えて表す表現と言えよう。

「みえる」の視覚領域における多義ネットワークは、田中(1999a)で分析したように、「視知覚行為を核とする出来事」をフレームとして、このフレームを構成する要素のどれかが特に焦点化されることで形成されている。すなわち上記の意味(A)からさらに、(B) 対象が視知覚可能である、(C) 主体が視知覚能力を持つ、(D) 対象がある判断を促す外見的特徴を持って視界内に存在する というように拡張している。この焦点移動による拡張は時間的・空間的隣接関係に基づいており、メトニミー的な認知作用によるものである。

以下、概念(意味)の記述を簡略化して述べると、まず(A)の 対象の視界内存在 から(B)の 対象の視知覚可能性 へと焦点が移動する要因は、 対象が視界内に存在する という事態の前提化、または視界条件の提示である。前提化は否定や主題化など文脈の影響によって生じ、視界条件の提示は、障害物の有無や距離、明るさ、対象の大きさなどへの言及によって行われる。次の例文中の破線部がそれに該当する。

(23) a コンクリートの堤防が視界をさえぎり、そのむこうにある海は見えない。

(『たまご猫』_♂、196)

b 初めは肉眼で見える大きさだが、枝分かれして細くなり、しまいには見えなくなる。

(『唯脳論』_♂、62)

次に(B)(対象の)視知覚可能性 から(C)(主体の)視知覚能力 へと焦点が移動する要因は、対象概念の希薄化または主体概念の顕著化である。対象が漠然としたものであるほどその概念は希薄となり、主体、とりわけ視覚器官への言及は主体概念を顕著にする。

(24) a 偏頭痛オーラ自体は決してありがたいものではない。これが現れると、三十分はものが見えなくなる。

(『矩形の』_♂、45)

b お前、闇でも目が見えるそうだな。

(『見知らぬ』_♂、219)

また(A)から(D)への焦点移動、すなわち<判断を促す外見的特徴>の焦点化の要因は、特定の判断内容が提示されることにより、視界内に存在する対象のうち、この判断と結びつく側面が特に焦点化されることになる。

(25) a 外から見ると、一見女には見えるが、...

(『涼しい』_♂、115)

b クジラは魚に見えるがじつは哺乳類である。

(『はじめて』_♂、155)

以上に見た複数の意味は、「みえる」の視覚領域における多義ネットワークの主要部分をなしている(ほかに「来る」の尊敬表現としての意味もある)。

2.1.2 高次認識領域への拡張

この視覚領域における多義ネットワークの各節点は、以下に見るように、高次認識領域の多義ネットワーク上に対応する節点を見出す。すなわち視覚領域から高次認識領域

への拡張は、フレームぐるみで生じている。

まず視覚領域における上述の(A) 対象の視界内存在 からは、次の例が示すように、高次認識領域における(A') 対象の《視界》内存 という意味が生じている。ここで《視界》は、ある主体の意識的な高次認識作用の及ぶ範囲(認識可能範囲)を指す。これはメタファー・シネクドキー的拡張である。

(26) 前途に見えるのは、戦争と変革の絶えざる道である。 (『信長』、159)

(27) …強力な権力への期待のようなものが見え隠れする時があるからだ。

(『カオス』、33)

(28) 少し親しんでみれば、正哉のぶっきらぼうな一面に、人慣れしない不器用さや愛情の深さがほの見える。 (『呪の』、118)

次に、視覚領域の(B) 対象の視知覚可能性 からは、次の例が示すように、高次認識領域における(B') 対象の認識可能性 という意味が生じている。

(29) 自分がどんどん大きくなっていることを感じる。自分が生きていることの意味が、鮮明に見えてきている。 (『デウス』、95)

(30) これまでに入力したデータからはまだ真相が見えてこない。

(『種の』、391)

(31) おそらく彼等も、彼等なりの天下布武の理想と思考を有していたに違いない。しかし、その思考の形が、私の眼にはよくは見えてこないのである。

(『信長』、275)

この(B) から(B') への拡張もまたメタファー・シネクドキー的拡張であるが、その一方で、高次認識領域内での意味関係を見るなら、(B') の 認識可能性 は(A') の 《視界》内存 からの焦点移動による拡張としても動機づけられる。例文中の破線の部分は、その焦点移動を引き起こす要因、認識可能範囲内に存在するという事態の前提化、あるいは認識可能条件の提示を示す。「鮮明に・よく」など理解の明確さに関わる修飾語も、また「某の目には」といった認識主体の限定も認識可能条件の提示となる。

さらに、視覚領域の(C) 主体の視知覚能力 からは、次の例が示すように、高次認識領域の(C') 主体の高次認識能力 という意味が生じている。

(32) 傍観者の方が、状況がよく見えた。 (『曼』下、102)

(33) 鎌子ほど物の見える男は、この国に他にはいない。 (『反逆者』、415)

(34) わしに箴言を呈した男は、さきの視える男だ。 (『太公望』上、102)

これについても、(B') と同様のことが言える。すなわち(C') は、(C) からのメタファー・シネクドキー的拡張として動機づけられるほかに、高次認識領域内での(B') からの焦点移動、すなわちメトニミー的拡張としても動機づけられる。ここで

も上例の破線部は、その焦点移動の要因となる、認識対象の概念の希薄化ないし認識主体の概念の顕著化を示す。

最後に、視覚領域の(D) 対象が判断を促す外見的特徴を持って視界内に存在するからは、次の例が示すように、高次認識領域の(D') 対象が判断を促す表層的特徴を持って認識可能範囲内に存在するが生じている。

(35) 私のそのような気持ちは 不純な 動機と見えるかもしれない。
 (『紫式部』 ㍁、224)

(36) 正の権力に慣れた目からすれば、負の権力は面倒に見えるだろう。
 (『涼しい』 ㍁、107)

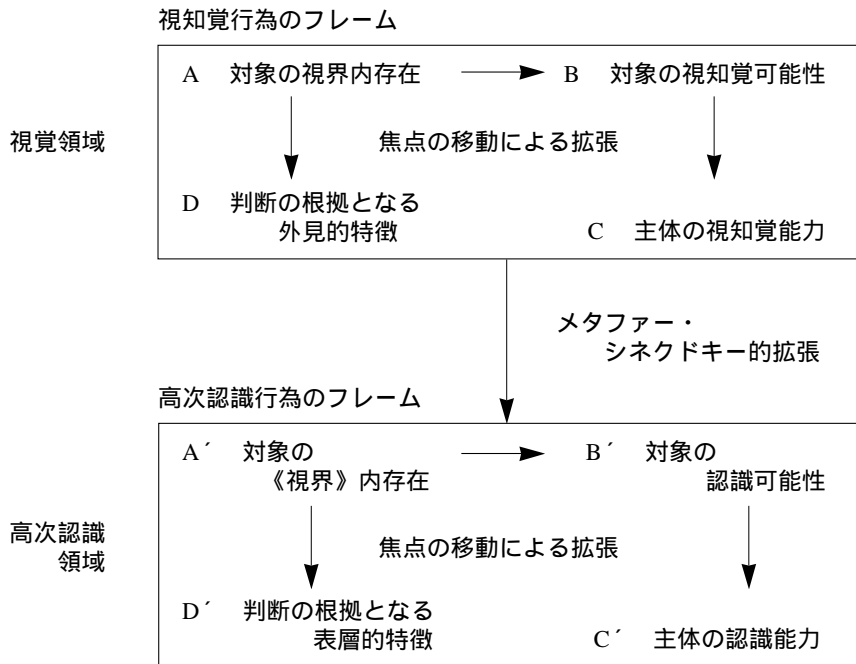
(37) そして、のちに政府機関から発表された客観的なデータは、そのどれもが、私には嘘っぽく見えた。
 (『プルトニウム』 ㍁、155)

ここでも同様に、(D') は高次認識領域内での(C') からの焦点移動としても動機づけられる。破線部はその要因である判断内容の提示を示す。

次の図(1)は、以上に見てきた「みえる」の高次認識への拡張を示したものである。

図(1)

「みえる」の高次認識への拡張



このように「みえる」の多義構造を見てくると、視知覚行為を核とする出来事のフレームがそのまま上位の領域である高次認識領域へ転移されるという形になっている。これは、我々の文化モデルにおいては、フレームの核をなす視知覚行為がそれ自体高次認識行為に等しいものとして捉えられているということの反映であると言えよう。

2.2 名詞「目」の場合

2.2.1 視覚領域でのフレームに基づく拡張

「目」の多義化の出発点となる意味は、視覚領域の(A) (典型的には人間の)視覚器官 として記述できるが、視覚器官 として一括できるこの概念も物体面、機能面という異なる側面を含んでおり、どの側面が顕著であるかによって意味の微妙な差が出てくる。またその異なる側面からは、それぞれ異なる方向への拡張が生じている。このような「目」の多義構造の全体については田中(2001)で分析しているが、ここでは視覚から高次認識への拡張という視点から考察することにする。

まず視覚領域での多義性を見ると、(A) 視覚器官 という概念のうち特に機能面の顕著な用法としては次のようなものがある。

(38) 目が見える・目が見えない・目がいい・目が悪い・暗がりに目が慣れる・目がくらむ

この 視覚機能 の側面から、「視知覚行為を核とした出来事」をフレームとして、その構成要素間の焦点移動により、(B) 視線 および(C) 視界 への拡張が生じている。

まず(B) 視線 を表す実例を次に示す。

(39) a ...美紀は何も言わずに膝の資料に目を落とした。でも、その目は文字を追いかけてはいない。 (『記憶』、23)

b 指先を見ていた田端さんの目が、ぼくの顔に注がれた。 (『奇跡』、120)

c ひとの目に触れないものは、なんとつつしみ深いのだろう。 (『0と一』、113)

次は(C) 視界 を表す実例である。

(40) a 借りたスカートが目に入った。 (『N・P』、186)

b 天井の蛍光灯が瞬いて、灯ともる。六畳ちょっとの部屋が目に見れる。片づいた部屋だ。 (『ブルトニウム』、32)

c ぼんやり電車の窓から外を見ている、降りてからもう一度思い出そうとすれば、目を過ぎていった風景をよみがえらせるくらいのことはできる。 (『翡翠』、281)

本稿で取り上げるのは、視覚機能、視線、視界 というこの三つの意味である。ただし、「目」にはこのほかに、視知覚行為 および 視覚対象の外見 を表す用法もある。前者の例としては「一目でわかる」「一目で気に入る」などがあり、後者の例としては「見た目が悪い」「見た目は老けている」などがある。ただこの二つの用法については、現れる環境が「一目」や「見た目」のように限られており、複合表現の全体的な意味の一部ではあるがまだ「目」の語義として十分に定着していないとも言える。そうではあっても、ここで「目」が表す概念はどちらも視知覚行為の場面の一要素となる概念であり、語義化へ向う動機は十分にあると言えよう。

2.2.2 高次認識領域への拡張

視知覚行為を核とする出来事のフレームに基づく焦点移動として今見てきた三つの意味は、「目」という広い意味を持つ語の多義ネットワークの一部をなしているが、この下位ネットワークの各節点は、高次認識領域での多義ネットワーク上にそれぞれ対応する節点を持っている。対応する節点どうしを見れば、視覚領域から高次認識領域へのメタファー・シネクドキー的拡張であるが、一方、高次認識領域内部で多義構造を見るなら、高次認識行為を中心とするフレームに基づくメトニミー的拡張と言うことができる。まず視覚領域の(A) 視覚機能 からは、(A') 高次認識能力 が生じている。

(43) 話し合いが暗礁に乗り上げたのは誰の目にも明らかだった。

(『天正』 ㍷、281)

(44) ギンガ百貨店自由が丘店の超お値打ち品ともいえる彼を恋人にした女は、「お目が高い」と讃えられることまちがいなした。(『殺ったのは』 ㍷、53)

(45) しかし戦後の日本人はかく歴史を相対化する目がなく、(...)

(『国民』 ㍷、662)

次に、視覚領域の(B) 視線 からは、高次認識領域の(B') 注意・関心 が生じている。

(46) (...) 今後インド亜大陸からは片時も目が離せない状況となっている。

(『種の』 ㍷、32)

(47) 仕事にかまけて娘に目が行き届かなかった自分に責任があるのか。

(『枯れ蔵』 ㍷、277)

(48) 箇鬼という人間を知る上では、その時代に目が及ばなければならない。

(『逃亡』 ㍷、236)

(49) ここで思い切って目を西ヨーロッパの地に転じていただきたい。

(『国民』 ㍷、260)

上の例のほか、「目を向ける・目をそむける・目を配る・目をつける」など多くの「目」

を含む複合表現が、全体として「視線をある対象に向ける」意味から「注意・関心をある対象に向ける」意味へと転じている。その応用範囲の広さから、注意・関心 という概念は、単に複合形式の中に固定された意味という以上に、「目」の語義となっていると考えてよいであろう。

最後に視覚領域の（C） 視界 からは、高次認識領域の（C'） 認識可能範囲 という意味が生じている。この概念はその本質上、先の 注意・関心 の概念と連続していて、境界線は曖昧である。

(50) 京の朝廷の存在など、義詮の眼にも入らなかったようだ。

（『道誉』下、193）

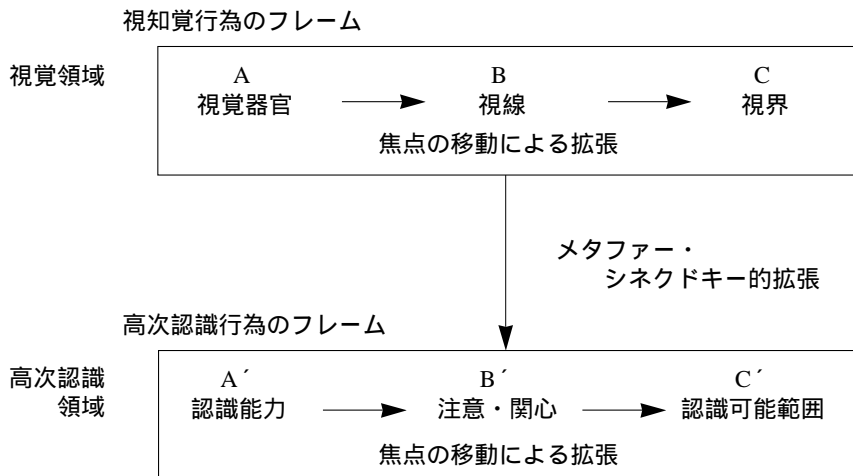
(51) 「暗愚としか思えぬことが多い、いまの帝は、広い目をお持ちでない」

（『道誉』上、187）

次の図（2）は、以上に見てきた「目」の高次認識への拡張を示したものである。

図（2）

「目」の高次認識への拡張



以上に見たように、「目」においても、視覚行為を核とする出来事をフレームとするメトニミー的多義ネットワークは、ほぼそのまま高次認識領域へと拡張している。その背後には、視覚行為を高次認識行為としてメタファー・シネクドキー的に捉えるという認知のありようがうかがわれる。

3 . 結論：視覚から高次認識への連続性

以上に考察してきたところから、次の結論が導かれる。

まず、他の知覚動詞の中でも特に視覚に関わる動詞「みる」はすぐれて高次認識表現としての機能を持っている。そのことは、まず第一に、「みる」の高次認識表現としての汎用性として現れている。第二に、知覚にとらわれずより総合的で分析的な判断を「みる」が表すことができるという点に現れている。

次に、「みえる」および「目」に共通する特徴として、視知覚行為を核とする出来事をフレームとした多義ネットワークがそのまま高次認識領域へと拡張しているところから、視知覚行為と高次認識行為とが連続的に捉えられていることが暗示される。

従って、視覚表現が高次認識作用を表すのは偶然の結果や文脈による臨時的解釈からではなく、視覚行為および高次認識行為についての我々日本語使用者の一貫した捉え方知覚・認識に関する文化モデル に由来するものであると考えられる。

注

- 1 本稿は、2000年9月9日の日本認知言語学会第一回大会ワークショップにおいて口頭で発表した論稿「視覚から高次認識へ 視覚表現から見た連続性 」に基づき加筆修正したものである。
- 2 詳しくはQuinn & Holland (1987) Roy D'Andrade (1987) 参照。
- 3 この点については、部分・全体関係に基づくメトニミーではないかという瀬戸賢一氏の指摘(日本認知言語学会第一回大会にて口頭でなされたもの)があるが、本稿では、典型的なメタファーと考えられるケースとの整合性があるという理由で、異なる意味領域の間およびそれらを包摂する上位の意味領域とそれら下位の意味領域との間の意味拡張とする立場を取る。
- 4 Fillmore (1982) のこの用語("frame")は、簡単に言えば言語表現の意味を定義する背景情報のことである。広い意味ではこれも、Roy D'Andrade (1987: 112) に従って民間モデルないし文化モデルと呼ぶことができる。ただしFillmore的な意味でのフレームは主として言語表現の側から見た用語であり、表現と結びついた特定の場面に言及するには便利な概念である。ここでは便宜上、より一般的な上位概念としての文化モデルと並んで、この用語をも使用する。

参考文献

- 国広哲弥 1994 「認知的多義論 現象素の提唱 」 『言語研究』第106号 日本言語学会
22 - 44頁
- 佐藤信夫 1978 『レトリック感覚』 講談社
- 佐藤信夫 1981 『レトリック認識』 講談社
- 佐藤信夫 1986 『意味の弾性』 岩波書店 (=1996 『レトリックの意味論』 講談社)

- 田中聡子 1996 「動詞「みる」の多義構造」 『言語研究』第110号 日本言語学会 120 - 142 頁
- 田中聡子 1999a 「動詞「みえる」の多義化とレトリック」 『岡崎学園国際短期大学論集』第6号 岡崎学園国際短期大学 55 - 71頁
- 田中聡子 1999b 「視覚動詞の意味論」 博士論文（名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻）
- 田中聡子 2001 「「目」の多義構造 フレームと比喻複合」 『言葉と文化』第2号 名古屋大学国際言語文化研究科日本語文化専攻 61 - 78頁
- 初山洋介 1997 「慣用語の体系的分類 一 隠喩・換喩・提喩に基づく慣用語の意味の成立について一」 『名古屋大学国語国文学』第80号 名古屋大学文学部 29 - 43頁
- 森田良行 1982 『基礎日本語辞典』 角川書店
- Lakoff, George 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Lakoff, George & Johnson, Mark 1980 *Metaphors We Live By*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1999 *Grammar and Conceptualization*. Berlin, New York : Mouton de Gruyter.
- Fillmore, Charles J. 1982 "Frame Semantics", in Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul : Hanshin Publishing Co. pp.111-38.
- Quinn, Naomi & Holland, Dorothy 1987 "Culture and cognition", in Holland and Quinn (eds.), *Cultural Models in Language and Thought*. Cambridge : Cambridge University Press. pp.3-40.
- Roy D'Andrade 1987 "Afolk model of the mind", in Holland and Quinn (eds.), *Cultural Models in Language and Thought*. Cambridge : Cambridge University Press. pp.112-148.

引用例出典（引用順）

- 養老孟司 『涼しい脳味噌』、文春文庫 / / 内田康夫 『「須磨明石殺人事件」』、トクマノベルス / / 岡田節人・南伸坊 『生物学個人授業』、新潮文庫 / / 篠田節子 『贖作師』、講談社文庫 / / 小池真理子 『プワソンの匂う女』、光文社文庫 / / 永井路子 『望みしは何ぞ』、中公文庫 / / 岳宏一郎 『天正十年夏ノ記』、講談社文庫 / / 戸井十月 『デウス』、双葉文庫 / / 神一行 『消された大王饒速日』、学研M文庫 / / 陳 舜臣 『中国の歴史』六、講談社文庫 / / 桜田晋也 『元就軍紀』、祥伝社文庫 / / 小林英樹 『ゴッホの遺言』、情報センター出版局 / / 山田風太郎 『柳生十兵衛死す』上、小学館文庫 / / 養老孟司 『唯脳論』、青土社 / / 本川達雄 『ゾウの時間 ネズミの時間』、中公新書 / / 隆慶一郎 『見知らぬ海へ』、講談社文庫 / / 岡島二人 『殺人者志願』、光文社文庫 / / 皆川博子 『たまご猫』、ハヤカワ文庫 / / 矢口敦子 『矩形の密室』、徳間書店 / / 小阪修平 『はじめて読む現代思想』、芸文社 / / 秋山駿 『信長』、新潮社 / / 金子邦彦 『カオスの紡ぐ夢の中で』、小学館文庫 / / 加門七海 『呪の血脈』、角川春樹事務所 / / 北上秋彦 『種の終焉』、祥伝社文庫 / / 陳 舜臣 『曼陀羅の人』下、集英社文庫 / / 井沢元彦 『日本史の反逆者』、角川文庫 / / 宮城谷昌光 『太公望』、文芸春秋 / / 駒尺喜美 『紫式部のメッセージ』、朝日選書 / / 沙藤一樹 『プラトニウムと半月』、角川ホラー文庫 / / 西谷史 『記憶』、角川ホラー文庫 / / 真保裕一 『奇跡の人』、新潮文庫 / / 北林優 『0と1の間』、ハルキ・ノベルス / / 吉本ばなな 『N・P』、角川文庫 / / 篠田真由美 『翡翠の城』、KODANSHA NOVELS / / 日本推理作家協会編 『殺ったのは誰だ?!』、講談社文庫 / / 西尾幹二 『国民の歴史』、産経新聞社 / / 永井するみ

言語文化論集 第 卷 第2号

『枯れ蔵』、新潮文庫 / / 泡坂妻夫『垂愛一郎の逃亡』、創元推理文庫 / / 北方謙三『道誉なり』上・
下、中公文庫